

# 生徒が主体的に学習する中学校社会科の研究

## —効果的なグループワークとは—

教職実践専攻・教育実践開発コース

学籍番号 17GP507 氏名 斗澤 晴加

### 1 はじめに

本研究では、生徒が主体的に学習する社会科の授業方法の一つとしてグループワークについて考えていく。平成28年12月に示された中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等改善及び必要な方策等について」の中では社会科の課題として主体的に社会に参画しようとする態度の育成が挙げられている<sup>i</sup>。大学生を対象に、自身の小・中学校時の社会科学習について行われたアンケートからも「社会科が好き/嫌い」の回答理由として「暗記が得意/不得意」というものが多くみられ、彼らにとって社会科は暗記教科として認識されていたことが述べられている<sup>ii</sup>。暗記が目的となっている社会科では主体的に社会参画していく態度が育成されるとは言えず、本来の目的を達成できない。生徒が社会科で学んだことを生かし、主体的に社会に参画していくためには社会科の授業でも、生徒が主体となって考えていくことが必要である。社会科教育の意欲的な先行研究に学び、本研究では社会科の授業における効果的なグループワークについて実践することにした。学校実習を行ったA中学校では社会科の授業でグループワークが行われ、ワークシートを4人で協力して解決していく授業となっており、生徒は意欲的に取り組んでいる姿が見られる。生徒が主体的に取り組むことができる社会科にするために、このグループワークをより効果的にするための手立てを実習での観察や先行実践研究、授業実践の文献を分析し本研究を進めることにした。

### 2 研究の取り組み

先行実践研究は、生徒が主体的に取り組むためにどのようなことをしていく必要があるかを考えてきた。新潟市立石山中学校教諭の小林朗は「主体性の開発」を目的とした討論授業を実践している。課題は二者択一となっているが、どちらかが正解というものではない。生徒がそれぞれ自分の立場を決めて話し合うことで、歴史認識を深めていく授業になっている。小林は実践の中で生徒の実態として「孤立化」を挙げ、主体性のある授業が生徒の「孤立化」を払拭するとしている<sup>iii</sup>。生活上で自分の意見を言うことはなかなか難しいが、授業の中での意見は中学生は言いやすい<sup>iv</sup>。そして、この経験を積むことで自らを表現していく力がついていくのではないだろうか。また、自分の意見を表明する規模も最初からクラス単位では難しく、4人という人数だからこそできるのだろう。話し合いを行った後、クラス規模で意見を交流していくことが、意見を表明しやすい環境づくりにつながるとともに、内容の深まりにもつながるだろう。2018年2月27日、実際に「文明開化日記」のベスト3を決める授業を参観させていただいた<sup>v</sup>。単元構成は、明治維新・文明開化について学習したまとめとして、当時の人々の一日を描く日記を書く活動を行う。日記を書く際には、場所・立場・文明開化に関連する内容は必ず書くということだけを指定しており、あとは自由に書くことになっている。生徒が書いた日記を読むと、文

明開化の事実の羅列だけでなく、当時の人々の心情を考えて書いているものが多く、単純な事実の理解よりも深く考えられている様子が見られた。日記を書いた次の時間には、日記のベスト3を話し合う活動を行う。このベスト3は初めに日記への質問がないか班で確認する。出た質問は板書で共有し、答えられる生徒が答える。質疑応答の様子を見ていると、あらかじめ質問を予想し、答えられるように準備している生徒もいた。次に、班で個人の意見を共有する。活動の様子を見ていると、自分が選んだ日記の理由を班で共有する際に、これまで学んできた知識を整理しながら他の生徒に説明していたり、逆に事実に基づかないものはどのような点が異なっているのかを資料を基に考えていたりする様子が見られた。次に、班で話し合ってベスト3を決める。多様な他者の考えを踏まえた上でもう一度自分の意見を見直し、意見を再構成していた。そして、この活動の最後はもう一度再構成した個人の意見表明で終わることで主体性の開発へとつながっていくのだと感じた。同時に、本時の授業を参観して、グループワークで質問やベスト3を決めることは主体的に生徒が授業に取り組むことに一定の効果があるのではないかと感じた。ただ、自分で意見を形成して終わりではなく、グループ内で意見を共有することで、自分が選んだ理由を説明する必要がある。そのため、より深く自己の意見を考えることができている。また、班の他の生徒の意見を聞くことで、一人では気づかなかった視点や異なる立場の意見を聞くことができる。全体討論でも他者の意見を聞くことはできるが、気軽に発言することは容易でなくなるだろう。四人という人数で意見を交換することで、生徒は本音で意見を出し合うことができる。つまり、グループワークで話し合いを進めていくことで、生徒は自分の意見を見直し、再構成していくことになる。グループワークを取り入れることは、生徒の深い学びを保証することができる。

また、千葉県の中学校教師であった三橋広夫（前日本福祉大学）の実践からは、教科書の使い方について考えた<sup>vi</sup>。教科書は子どもたちにとって共通の知識となるものである。教科書にない題材は目新しさがあり、子どもたちの興味をひきやすいという利点がある一方で、見たことのないものだと話し合いに参加できない子どもがいたり、物知りな子どもしか活躍できない話し合いになったりする可能性がある。教科書の記述を鵜呑みにするのではなく、疑問を見つけるという目的をもって読むことができるようにしていく授業を行うことで考えることが目的となる授業になっていくだろう。また、子どもたちに話し合いをさせるためには子どもたちの対等性が確保されていることが大切である。三橋の実践から子どもたちが平等に話し合うための手立てが必要であることを学んだ。

そして、社会科の授業で、思考力・判断力・表現力を育てていくためにはグループワークでの学びが、「教え合い」から「学び合い」になる必要がある<sup>vii</sup>。教科書の内容を理解し、まとめる作業では「教え合い」にとどまってしまう。そのため、話し合いにするためには教科書のレベルを少し超える学習課題が必要である。事実をまとめるだけでなく、そこに理由などを考える発展的な活動になることで、「教え合い」から互いに意見を交流する「学び合い」へと高まっていくのではないだろうか。また、「どうして」「なぜ」が含まれる学習課題は意見交換がしやすいので、グループワークでの学習課題を工夫していく必要がある。

以上の先行実践の研究から、研究仮説を「効果的なグループワークを取り入れれば、生徒が主体的に学習に参加するだろう」とした。

### 3. 授業実践

#### (1) 単元の指導計画と評価

単元名：中学校2年地理的分野

第2編 日本のさまざまな地域

第3章 日本の諸地域、

第1節 九州地方

一環境問題・環境保全に向き合う

人々の暮らしー（東京書籍）

実践日：2018年8月27日～9

月4日

#### (2) 単元の構成

本単元では、前述した小林朗の実践を参考に単元を構成している。学習指導要領では、「日本の諸地域」の

取り扱いについて、「地域の特色ある事象や事柄を中核として、それをほかの事象と有機的に関連付けて、地域的特色を追求すること」とある。本単元では九州地方について自然環境を中核とし、それを人々の生活や産業と関連付けて九州地方の地域的特色をとらえさせる。そのため、毎時間教科書を参考に本時の学習内容を整理するワークシートを生徒自身で完成させる活動を行う。ワークシートの活動時間はグループワークとし、班で協力してワークシートを完成させる。班でワークシートの活動を行うことで、お互いに教え合いながら学習する。生徒同士で教え合いを行うことで、知識が一方的に伝達されるのではなく生徒自身が知識を獲得していくことができるようにしていく。そして、習得した知識の活用を図る指導の手立てとして、4・5時間目に「持続可能な社会を作るために必要なことは何か」を子どもたちの暮らす弘前市に置き換えて考えていく。これまでの学習を生かして、自分たちの暮らす弘前市をどんな街にしていきたいのかというテーマで、4時間目に個人でレポートをまとめさせる。自分たちの暮らす地域で考えることで、より具体的に自分には何ができるか、弘前市にはどんな取り組みが必要なのか自分の生活経験を基に考えることができる。また、そのレポートを用いて、5時間目にレポートのベスト3を決める活動を行う。まず初めに個人でベスト3を考えた後に班で共有させ、次に班でベスト3を決めさせる班活動を行う。この活動によって自分の意見を伝えるとともに他者の意見に耳を傾け、さらに自分の意見を深める活動をする。最後に、個人でもう一度ベスト3を決め、自己評価に生かしていくようにする。4・5時間目の授業はグループワークに重点を置く。1～3時間目の教え合いのグループワークを活かして、4・5時間目は話し合い活動を行っていく。自分のレポートを書くための問題意識を共有する4時間目のグループワークでは、自分の生活経験から弘前市の問題点をグループで考えることでレポートへの意見形成へとつなげていく。5時間目のグループワークでは自分の意見を決めさせた後にグループワークを行い、より多面的・多角的に自己の意見を形成できるようにしていく。

#### (3) 生徒の実態

実習校である弘前市立A中学校2学年の生徒は、社会科への授業意欲が高い生徒が多く、授業中に




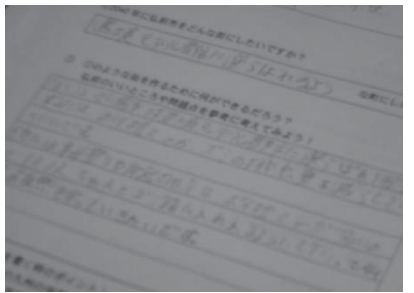
単元の学習課題：持続可能な社会を作るために自分ができることは何だろうか？

題材名	時	学習目標	評価規準	評価方法
1. 九州地方の生活の舞台	1	九州地方の人々が生活する自然環境にはどのような特色があるのだろうか	地図や雨量図を通して九州地方の自然環境の特色を理解している【知識・理解】	発表 ワークシート
2. 九州地方の人々の営み	2	九州地方の人口や産業にはどのような特色がみられるだろうか	地形や気候を生かした農業について資料から読み取ることができる。 【資料活用・技能】	発表 ワークシート
3. 工業化・都市化に伴う地域への影響	3	九州地方の人々は工業化や都市化による環境問題にどのように向き合ってきたのだろうか	水俣市と福岡市の環境保全の取り組みについて理解している。【知識・理解】	発表 ワークシート
4. 持続可能な社会を作る①	4	持続可能な社会を作るために、自分ができることは何だろうか？	持続可能な社会の構築に向けて、これまでの学習事項を生かして多面的・多角的に考察し表現している。【思考・判断・表現】	発表 ワークシート 個人レポート
5. 持続可能な社会を作る②	5	弘前市を持続可能な社会にするために必要な取り組みベスト3を決めよう！	これまでの学習内容を生かして自分の意見を形成し、より良い意見を取り入れようとしている。 【関心・意欲・態度】	発表 ワークシート 班活動

挙手して発言する生徒も多い。一方で、挙手できていない生徒は、ほとんど授業に参加できていない生徒でもある。また、ワークシートの活動ではほとんどの生徒が自力解決を試みており、知識の習得について一定の成果が見られた。しかし、中には他の生徒から答えを教えてもらうことや、答えが発表されるのを待つてしまう生徒も見られる。また、毎時間グループワークを行っていることから、話し合い活動に慣れており、意見をまとめることもできているが、生徒の意見をくみ取れずにグループワークが進められている場面も見られた。

#### (4) 授業の経過と考察

##### ① 4時間目 (2018年9月3日3時間目) [○授業後指導された事項 ●授業者の評価]

導入		<ul style="list-style-type: none"> <li>・北九州市洞海湾の写真を提示。変化しているところを読み取り、教科書で北九州市の取り組みについて調べた。</li> <li>●なぜ変化したのか1度予想させるとワークシートの活動にスムーズに取り掛かれた。</li> <li>○北九州市の産業や取り組みについての説明が十分ではなかった。</li> </ul>
展開 1		<ul style="list-style-type: none"> <li>・これまで学習してきた九州地方の自然環境を守るための取り組みについて復習。それぞれの取り組みが持続可能な社会の形成につながっていることを確認し、本時の学習課題を提示。</li> <li>●取り組みについて説明が多かった。これまで学んできた取り組みの分類を生徒に考えさせる必要があった。</li> </ul>
展開 2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・弘前市のいいところと問題点について個人で考えた後に、班で共有させた。</li> <li>・その後班ごとに紙にまとめ発表させ共有した。</li> <li>●班活動の係分担や発表の仕方を事前に説明するとスムーズに授業が進む。</li> </ul>
まとめ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・2040年に弘前をどんな街にしたいか、そのために何ができるかという課題を提示し、個人でレポートを書かせた。</li> <li>●レポートを、次の時間に使うことやお互いに評価しあうことを伝えると、レポートの書き方や内容の質が上がった。</li> </ul>


②4 時間目の考察

展開 2 のグループでの話し合いで、弘前市のいいところとして、自然環境が豊かであることや、イベントや観光施設が多いことが挙げられていた。一方で弘前市の問題点としては人口の少なさや、都市が発展していないことが多く挙げられた。特に、都市部と比べ、遊ぶ場所の少なさや商業施設の少なさを日頃から生徒自身も感じているため、問題点として強く訴えていた。

まとめとして書いたレポートを分析すると、大きく分けて 6 つに分類することができた。レポートの内容は多岐にわたるため、中にはいくつかの取り組みを組み合わせるものもあった。組み合わせとしては、自然環境を守る取り組みと短命県を返上する取り組み、都市化と自然環境を守る取り組みがいくつか見られた。

特に内容について指定はしなかったが、レポートを書く前にポイントとして①九州地方の学習を活かして書くこと、②できるだけ実現できるもの考えることの 2 点を提示した。分類の結果を見ると、自然環境に対する取り組みをレポートにまとめる生徒が 1 番多かった。九州地方の学習は、自然環境を軸としたため、その知識を活かしてレポートを書いた生徒が多かったといえる。単元のまとめとして、これまで学習してきた知識を活用する手立てであるレポート活動が有効であったといえる。

③5 時間目 (2018 年 9 月 4 日 3 時間目)

導入		<ul style="list-style-type: none"> <li>・前時に書いたレポートを読み、クラスのベスト 3 を決めることを伝える。</li> <li>・レポートを読む前に、ベスト 3 を決める時のポイントについて確認。</li> <li>●似ている内容のもので分類すると子どもたちも見やすく、意見も多岐に分かれたかもしれない。</li> </ul>
----	---	--




(表 1) 展開 2 で出た意見

いいところ	問題点
歴史的なものが残っている 特産物がある 天候に恵まれている 桜がきれい・桜祭り りんごの収穫量が日本一 岩木山 緑が多い・自然豊か 城がある ねぶたがある イベントが多い 公共施設が充実している	変わり映えしない 老人ホームが多い(老人が多い) 土地が広いのに人口が少ない 遊ぶところが少ない りんごしかない 方言が分からない いい人と悪い人の差が激しい 田舎臭い ダサい 少子高齢化の差が激しい、少子高齢化 子供が少ない ゴミが多い 短命 観光場所が少ない 交通が不便 発展していない 坂がたくさん 地域の人がうるさい

(表 2) レポートの分類

レポートの内容	人数 (29 人)
①自然を守る取り組み (ごみを減らす、リサイクル、自然を増やす取り組み)	19 人
②都市を発展させるための取り組み	12 人
③観光客を増やすための取り組み	5 人
④短命県を返上するための取り組み	5 人
⑤方言を無くすための取り組み	2 人
⑥地域のコミュニティに対する取り組み (地域住民の関係性をよくするための取り組み)	3 人

※重複あり

展開 1		<ul style="list-style-type: none"> <li>・レポートを読み、個人でベスト3を決めさせ、ワークシートに理由とともに書かせた。</li> <li>・書き終わったら、班で個人のベスト3とその理由を共有させた。</li> <li>・中には理由が書けない生徒もいた。どうしても間に合わない場合については番号だけでも伝えるように指示した。</li> </ul> <p>○レポートを全員分読む作業に飽きてしまう子がいる。 ○分類ごとにまとめたほうがよい</p>
展開 2		<ul style="list-style-type: none"> <li>・班でベスト3とその理由を決めさせた。</li> <li>・班活動の際には、係を決めて行った。</li> <li>・班でまとめた意見を発表し、全体で共有。</li> </ul> <p>○全体の発表の後に、質問や感想を共有する時間があつたほうがよかった。</p>
まとめ		<ul style="list-style-type: none"> <li>・自分の意見をもう1度見直し、ベスト3を決めさせた。最後に多数決でクラスのベスト3を決めた。</li> <li>・このクラスでは、ごみを減らす取り組みについて具体的な取り組みを提案していたものと、都市化と自然を増やす取り組みをバランスよく行っていくという意見が選ばれた。</li> </ul>

#### ④ 5時間目の考察

##### (i) ベスト3に選ばれたレポート

生徒②⑥ 日本一ゴミが少ないきれいな町にしたい！（有名な市になる）

私は弘前市を日本一ゴミが少ない、きれいな町にするために、1人当たりのごみの排出量を減らす取り組みをします。

例えば、週1回、フリマのような3Rを活用できるイベントを開催したり、イベントごとにきちんと分別ごみ箱を設置したりなどしてまずゴミの分別をします。そして、必要な量しか買わないように呼びかけて、食べ残しのないようにし、食品ロスを少しでも減らしたいです。

（ゴミの量が指定量を上回ると罰金などを設けるようにする！！）

→②⑥は、弘前市のごみの多さに注目し、ごみを減らすための取り組みについて具体的に述べている。ごみの分別の呼びかけやイベントの提案など、3時間目に学習した環境モデル都市である水俣市の取り組みを参照しながら書いているのではないかと考えられる。具体的な提案であり、ごみを減らすためにできる新しい取り組みが多く提案されていることが評価されて1位になったのではないかと考えられる。

生徒① 都市化：自然化が1：1のちょうどいい町にしたい！

のどかな所は本当にのどかで都市化が進んでいる所は本当に都会って感じがするのでヒロロ付近は自然を増やす。こっちの小沢はコンビニやスーパーなどを増やしたりすれば人がもっと住みやすくなるし本州の一番北なのにクツ暑いということが防げるかもしれない。自分たちは花とか植えることができる。

→①は、自分の生活経験から、弘前市内で都市化が進んでいる地域には自然を増やし、自分たちの暮らす地域をより暮らしやすくするために商業施設を増やすという提案をしている。生徒たち自身も、中心市街地とその他の地域の差を感じており、自分たちの暮らす地域は都市化が必要であると考えている。一方で九州地方の学習を通して都市化が進んだことによる問題点も学んでいるため、都市化だけでなく自然環境を守る取り組みも必要であると考えたのだろう。生徒達は都市化と自然環境の保護のどちらも行っていくことが今の弘前市に必要であると判断したため、自然環境の保護と都市化の両立を掲げているこのレポートを評価したのではないかと考えられる。

生徒② 短命県を返上した町にしたい！

- ・タバコを吸わない（呼びかけも）
- ・塩分、糖分をとりすぎない
- ・低地のところにも自然を増やす
- ・桜や弘前城にだけ頼るのではなく、自分たちでも有名になるようなものを造る
- ・ラジオ体操など、とにかく毎日動く

→②は、短命県返上に向けた取り組みを中心としながら、そのほかに弘前の課題として挙げられていた観光への取り組みや、弘前市の良さである自然を増やす取り組みについてまで具体的な提案がされていた。また、自分たちができることを中心に書いているため、評価の観点の一つである実現可能性があるという点で評価されたのではないかと考えられる。

(ii) ワークシートの構成

5時間目のワークシートは(1)～(3)で構成されている。(1)は最初に個人で決めた意見、(2)はグループで話し合って決めた意見、(3)は最後にもう一度個人で決めた意見になっている。

(iii) ワークシートの分析

(1)～(3)で生徒が選んだ番号にどのような変化があるかまとめたものが(表3)～(表7)である。表3はワークシート(3)での番号の選択の仕方についてまとめたものである。3に該当する生徒が28人中5名であり、ほとんどの生徒が班の意見に流されずに自分の意見を形成していることが見て取れる。また、ワークシート(1)と(3)で意見の変化がない生徒もわずか4名であり、グ

(表3) 番号選択の分類

(3)での番号の選び方	人数(28人)
1. 最初と最後の番号に変化なし	4人
2. 選んだものは(1)と(3)で同じ。順位に変化あり	2人
(i) 1位に変化あり	1人
(ii) 1位に変化なし	1人
3. (2)と(3)がすべて同じ	5人
4. (2)と(3)の番号が同じ。順位に変化あり	3人
(i) 1位に変化あり	2人
(ii) 1位に変化なし	1人
5. (3)で選んだ番号が(1) or (2)にあるもの(班の意見+自分の意見)	2人
(i) 1位に変化あり	1人
(ii) 1位に変化なし	1人
6. (1)と(2)にない番号を(3)で選択している	11人
(i) (1)と(3)の1位が同じ	9人
(ii) (3)の1位が(1)～(2)にない	2人
7. (1)～(3)がすべて異なる	1人

ループの話し合いを通じて多くの生徒が自分の意見を再構築していることが分かる。ワークシート(1)～(3)の順位を比較した表5・表6・表7からは、(1)・(2)どちらも①のレポートが1位に選ばれていることがわかる。1位から3位に選ばれたレポート自体にワークシート(1)～(3)を通じて変化はなかったが、ワークシート(3)ではワークシート(1)・(2)に比べて、⑯のレポートが5票の差をつけて1位となった。表4に注目すると、ワークシート(3)で新たに出てきた番号としてレポート⑯が1番多く出ていた。(3)で新たな番号が登場する原因としては、3点考えられる。1点目に、ワークシート(2)では選ばれなかったが、同じグループの中にその番号を選択した生徒がいた場合である。表3の6に該当する生徒と同じグループになっている生徒がワークシート(1)で選択していた番号を確認したが、9名中2名しか該当しなかった。また、その2名のうちレポート⑯に該当するのは1名だけであった。そのため、他の7名の生徒は2点目として他の班の発表を聞いてレポート⑯を選択したのではないかと考えられる。班で選んだ理由や他の班で選択している番号を聞いて、もう1度レポートを見直した結果、レポートの評価の観点として示した実現可能性や、具体的な記述があったことを評価して⑯を選んだのではないかと考えられる。また、3点目に、班での話し合いで⑯が候補に挙がっていた可能性も考えられる。

これらのことから話し合い活動によって生徒の見方がより多面的・多角的になったことがわかる。ワークシート(1)で選択した番号と他の生徒が選択したものを見比べ、意見を再構成したことがワークシートから見て取れる。話し合い活動に意欲的に取り組み、ほかの班の発表も自分の班の意見と比べながら聞いたことで、(1)で選択した時よりも本時のねらいに即して考えることができるようになり、学習のねらいに沿った修正をかけることができたのであろう。また、(1)の時点ではあまり深く読み取れていなかった生徒も、班での話し合いによって、主体的に考えることができていったため、意見が変わっていったのではないかと考えられる。

これらのことから話し合い活動によって生徒の見方がより多面的・多角的になったことがわかる。ワークシート(1)で選択した番号と他の生徒が選択したものを見比べ、意見を再構成したことがワークシートから見て取れる。話し合い活動に意欲的に取り組み、ほかの班の発表も自分の班の意見と比べながら聞いたことで、(1)で選択した時よりも本時のねらいに即して考えることができるようになり、学習のねらいに沿った修正をかけることができたのであろう。また、(1)の時点ではあまり深く読み取れていなかった生徒も、班での話し合いによって、主体的に考えることができていったため、意見が変わっていったのではないかと考えられる。

#### 4. 本単元の成果と課題

今回の授業実践では2つの成果と3つの課題があった。

成果の1点目は、話し合い活動を充実したものにできたことである。充実させられた要因の一つ目にグループでの活動を、個人の意見を班全体で共有する時間と班での意見を形成する時間に分けたことが挙げられる。意見を共有する時間と意見交換の時間を分けたことで、一人一人の意見を班全体で共有するだけに終わらず、班の意見形成の時に他の生徒の意見を踏まえながら自分の意見を話している生徒の様子が見られた。すぐに話し合わせるよりも、一人一人の意見が尊重されていた。班での話し合いを進めていくために、作業ごとに時間を分けていくことが大切だということが分かった。二つ目は、多くの生徒が班での意見共有の時間で自分の意見をしっかりと伝えることができていたことである。それは、すぐに話し合いを始めるのではなく、自分の意見をワークシートに記入する時間を設けたからである。話し合い活動に入るためには、生徒一人一人がまず初めに自分の意見を形成する時間を

(表4) 6・7の中で、新しく出てきた番号

1位(5人)	⑯
2位(3人)	⑮
3位(2人)	⑭、⑫
4位(1人)	①、②、③、④、⑤、⑥

(表5) (1)での順位

1位(10票)	①
2位(9票)	②、⑤
3位(6票)	⑩

(表6) グループごとの順位

1位(4票)	①
2位(3票)	②、⑤
3位(2票)	③、④、⑮、⑯
4位(1票)	⑥、⑦、⑧、⑨、⑪、⑫

(表7) (3)での票数

1位	⑯(15人)
2位	①、②(11人)



設けることが必要であることが分かった。三つ目に、学習課題の設定が生徒の身近な地域で考えるものであったことが挙げられる。自分たちの暮らす地域について具体的にどんな地域にしていきたいのか考えたことで、どの生徒でも意見を述べることができていた。学習課題を生徒の身近な課題にすることで生徒は主体的に考えることができ、話し合いも活発になるのではないだろうか。

成果の2点目として、レポート活動による生徒の学習参加が挙げられる。生徒のレポートを見ると、これまでの学習を生かしながら自分の意見を形成していた。特にベスト3に選ばれたレポートについては、九州地方の学習と弘前市の実態を関連させながらまとめることができていたため、他の生徒からも評価されていた。また、5時間目の生徒の様子を見てみると他の生徒の書いたレポートに興味をもって読んでいた様子が見られた。単元のまとめの活動として、レポートを書かせ、それを相互評価する活動は知識を活用していく活動として有効だと感じた。また、今回のような正解のない活動があることで、いつもは参加できていない生徒も自分の意見を言えるのではないかと活動を見て感じていた。

今後の課題として1点目に、話し合いやレポート活動で既習事項と関連させて考えさせることが不十分であったことである。今回の授業では九州地方の学習を踏まえた上で弘前市で何ができるかということを考えさせたが、弘前市と九州地方の類似点や異なる点をきちんと確認しなかったため単元の学習内容とあまりつながっていない記述も見られた。環境問題という点で共通する部分もあったが、大きな工業地域のない弘前市と北九州工業地域がある九州地方では地域の状況や課題が異なる部分の方が大きく、生徒もイメージしにくかったのではないかと感じた。また、弘前市の現状への理解も生徒の生活経験から考えられるものに留まっており、根拠となる資料のないまま話し合いが進んでしまった。もし、弘前市で考えていくなら弘前市の課題を示す根拠となる補足の資料が必要だと感じた。また、弘前市の課題について考えていくためには、九州地方だけでなくほかの地方との比較も必要だろうと感じた。日本の諸地域の学習の最後に、これまでの学習を踏まえて弘前市について考えていく活動にすると、一つの観点だけでなく様々な観点からの意見が出てレポートの内容も多岐にわたり多様な価値判断による話し合いとなり、より深まっていくのではないだろうか。

2点目に、レポートを書いたり、評価したりする指導計画の再構成である。教科書の内容理解の時間にかけることのできる時間が少なく、深い理解につながるまで扱うことができなかった。そのため、一つ一つの事項の理解が単純なものになってしまい、そのため、生徒もレポートを書くときにあまり参考にして考えられなかったのではないかと感じた。指導計画を生徒の実態に合わせて見直す必要があった。

3点目に、話し合い活動の役割の明確化である。話し合いの様子を見てみると、一部の生徒の意見でグループの意見が決められてしまうことがあり、班の中で意見が形成されていないグループもあった。話し合いの時に役割分担は行ったが、どのようにグループで意見を決めるかなどの確認は行わなかったため、話し合う前に一度確認が必要であった。

今回の実践から、グループワークによって生徒が本時の目標に即してより高いレベルで考えることができるようになることが分かる。自己の意見を形成した後、グループワークによって多様な他者の意見に触れ、より多面的・多角的に考えることができるようになっていた。また、グループの話し合いの中で自己の意見を他者の意見と比較することで、自分の意見を深く考えることができていた。つまり、グループワークによって、生徒は一人で考える以上に広い視野で物事を見て考え、より高いレベル

に到達することができたと言える。

近年、授業のアクティブ・ラーニングへの転換が求められ、学習指導要領でも「主体的・対話的で深い学び」への転換や、授業で生徒が能動的に学ぶということが求められている。生徒が能動的に学ぶ手段の一つとしてグループワークを取り入れるには、第一に生徒が対等に話し合える学習課題を提示することが必要である。これまでの既習事項を活かすことができる課題や、生徒の身近な地域に即した課題を設定していくことでどの生徒でも授業に参加することができる。また、「なぜ～」を活かした学習課題を知識理解の時間に活用していくことで、知識の獲得も一方的な伝達にならずに、子どもたち自身が獲得したものになるだろう。第二に、グループワークを行う際には、生徒が自らの意見をもって話し合い活動に臨める学習方法を構成する必要がある。漠然と話し合いをしても、話し合いがそもそも成立しなかったり、一部の生徒の意見で班の意見が決定してしまったりして、多様な見方・考え方になったとは言い難い。全員が話し合いに参加するためには、初めに自分の意見をしっかりと形成する時間を設けることが必要である。そして、その意見を共有したうえで話し合いが行われていくと、どの生徒も自分の意見と他者の意見を比較しながら考えを深めていくことができるだろう。そして最後にグループの意見形成で終わらせずに、もう一度自分の意見を振り返ることで生徒は主体性をもって最後まで課題について考えることができるのではないだろうか。

今後も、生徒が主体的に考えることができる社会科の授業にしていくために、グループワークを活用し、授業の中で子どもたちの発言を活かしていくようにしたい。また、活動だけでなく、生徒が学ぶ意義を感じられる課題設定や、身近な地域を活かした教材について考えていくことで、生徒が主体的に学ぶことができる授業へと改善していくようにこれからも研究を続けていきたい。

次年度からは、公立中学校の教員として教壇に立つことになる。本研究では教科指導を中心としていたが、学級経営など教職大学院の授業や実習で学んだことを、学校の一員として実践していきたい。

---

#### 参考文献

- <sup>i</sup> 濱野清, 藤野敦, 樋口雅夫「新学習指導要領における社会科のポイント」(文部科学省『中等教育資料』2017年8月号, P. 29)
- <sup>ii</sup> 柳下則久「子どもが主体となる授業の創造—問題解決学習への期待—」(教育出版株式会社編集局『小学社会通信まなびと [2017年秋号]』, 教育出版株式会社, P. 7)
- <sup>iii</sup> 小林朗「新田開発は武士と農民にとってどちらが有効か?—中学生が越後の新田開発を考える」(日本社会科教育学会第67回全国研究大会, 2017年9月17日, 千葉大学)
- <sup>iv</sup> 小林朗 同上 P. 4
- <sup>v</sup> 新潟市立石山中学校第2学年社会科指導案「第5章 開国と近代日本の歩み 2節 明治維新」(小林朗, 2018年2月27日)
- <sup>vi</sup> 三橋広夫「中学生の歴史認識を深める歴史の授業を作るために」(歴史教育者協議会『歴史地理教育』2016年7月増刊号, P. 71~72)
- <sup>vii</sup> 丸山信昭「生徒の学習意欲を高め, 学習課題への理解を深める学習活動の工夫」(上越教育大学『教育実践研究』第26集(2016), P. 42)

【付記】 実習校の校長先生をはじめ、教科指導や学級経営を指導していただいた先生方、授業実習でお世話になったA中学校の生徒達に感謝申し上げます。A中学校で学んだことを、次年度から学校現場で活かしていくことができよう頑張っていきます。